

氏名	中 山 堅 吾		
学位(専攻分野)	博 士(医 学)		
学位授与番号	博 乙 第 2438 号		
学位授与の日付	平成 4 年 6 月 30 日		
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)		
学位論文題目	難治性喘息の発症病態に関する研究 第1編 難治性喘息の臨床的検討 第2編 中高年発症型難治性喘息の臨床像について		
論文審査委員	教授 太田 善介	教授 辻 孝夫	教授 中山 睿一

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

難治性喘息について臨床的研究を行った。第1編では難治性喘息の病態を明らかにする目的で難治性喘息の臨床像や免疫組織学的所見を、軽・中等度のアトピー型喘息と対比検討した。その結果、難治性喘息の大多数例は通年性喘息であり、臨床的に感染の関与や抹梢血及びBALF中好中球増多が認められた。また、アレルギー学的検査所見では、カンジダ抗原の遅発・遅延型皮膚反応と沈降抗体の高い陽性率、及びDCRBによる抗IgG抗体に対する好塩基球の反応性亢進所見などから、IgGを介する反応系の関与が示唆された。肺機能検査上、抹梢気道の強い閉塞性障害が認められ、胸部レ線所見、並びにTBLBにより肺の器質的な変化も認められた。以上の各要因が喘息を難治化する重要な因子となっているものと考えられた。第2編では、Late onset asthma に多いと言われている難治性喘息(late onset intractable asthma; LOIA)の病態解明の目的で、発症年齢別にearly onset asthma (<40y.o.)及びlate onset asthma (>40y.o.)に分類し、さらにそれぞれを難治性喘息と非難治性喘息に分類することにより臨床症状、DCRB等アレルギー学的検討、BALF中の出現細胞所見、肺機能検査、胸部レ線所見、TBLBによる組織学的等の総括的な検討を試みた。その結果LOIAは、通年性、慢性の発作で、IgE以外のアレルギー反応の介在と、肺局所の好中球の関与、及び抹梢気道狭窄と気道の器質的な変化などの特徴的な難治化要因を有していると考えられた。

論文審査の結果の要旨

本研究は難治性喘息について臨床的研究を行ったもので臨床像や免疫組織学的所見などの要因が喘息を難治化する重要な因子となっていることを明らかにした。またLate onset asthmaに多いと言われている難治性喘息 (Late onset intractable asthma) では通年性、慢性の発作で、IgE以外のアレルギー反応の介在と、肺局所の好中球の関与、及び末梢気道狭窄と気道の器質的変化などの特徴的な難治化要因を有していることを明らかにした。これは臨床的に有意義な業績であり、よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。